

27年めど年38万ト規模

世界シェア3割見込む

ETIIC

技術供与のSSBR能力



日比谷代表

ETIIC（SSBR）設備の世界ライセンスの生産能力を2027年頃までに年産38万ト規模に高める。すでに同20万トのプラントに同社技術が採用されており、さらに18万ト規模の商談中の案件を抱える。省燃費タイヤのSSBRの世界市場は年間120万ト130万トとみられ、実現可能性の高い案件だけで3割ほどのシェアを獲得できる見通し。さらに展開する地域の拡大にも取り組んでおり、「省燃費タイヤ向け合成ゴムで世界のデファクトスタンダードを目指す」（日比谷陽一良代表）。

ETIICは、合成ゴムのコンサルティングやライセンスビジネスを手掛

ける企業。日比谷代表がかつて日本の合成ゴムメーカーに在籍して培った事業ノウハウやグローバルな人的ネットワークを用いて、最新鋭技術を含めた合成ゴムやエラストマーの開発および技術ライセンスを手掛ける。

自社の資産として工場や開発拠点は保有していないが、活用できる拠点は抑えている。自社でグローバルな人材を抱えるだけでなく、ドイッの同業であるIBC社とも協力関係にあり、高いレベルの交渉力もつ。IBC

ETIIC（東京都港區）は、省燃費タイヤに使われる最新型の溶液重合スチレンブタジ



浙江省で今春稼働した浙江石油化工有限公司のプラント

B社とは合弁会社を設けて互いの技術の融合による競争力の一層の強化も図る方針。21年に稼働したロシア・タタールスタン共和国

でも本来年内完工予定から少し遅れているが、建設が進む。中国では、最新型のSSBRは年7万〜8万トが輸入品で賄われてお

り、電気自動車（EV）の進展に伴い、需要は今後も高い成長が見込まれるが、同社技術によるプラントが続々完工していることで、国産品で賄える比率が高まっていくことになる。とくに同社は、タイヤとしての性能だけでなく、ゴムの加工性などにもこだわった分子設計を行っており、数百社あるとされる中国内の中小タイヤメーカーでも扱いやすい材料という。

「世界が政治的に分断されるなか、当社技術のプラントが世界のデファクトとなることで、中小のタイヤメーカーの助けとなることができる」（同）という。そうした視点も持ちながら、インドや中東での案件獲得にも力を入れて始めている。既存の省燃費タイヤ向け変性SSBRプラントのなかには、従来型SSBRの設計思想に則っているため生産性の低いものもある。同社技術によることで10%以上の省エネ実現が見込める。地域によって異なる電気とスチ

の同6万トに続き、今春には中国浙江省の浙江石油化工有限公司の6万トプラント、夏には中国石石油系の独山子石化（新疆ウイグル自治区）の同2・5万トプラントが稼働した。独山子の設備は6万トまで拡張が可能で、需要の成長に従って手直し増強が図られる。山東省でも来年内完工予定から少し遅れているが、建設が進む。中国では、最新型のSSBRは年7万〜8万トが輸入品で賄われてお

ームのコストを勘案しながら最適設計を提案できるといふ。また、グリッド性と低燃費に続いて要求が高まるタフさを併せ持つゴムの製造できる設備の開発も進めており、めどが立ちつつある。IBC社との合弁事業が立ち上れば、両社の技術を持ち寄ることで、さらなる高度化を図るとともに、ブタジエンゴム（BR）、エチレンプロピレンゴム（EPDM）も共同で展開することを検討する。